

トップ会談

中国の国土開発・インフラ整備に、
日本企業はどのような役割を果たしているのか。

三菱重工業株式会社 相談役 増田信行
日本国際貿易促進協会 理事長 中田慶雄

1972年の国交回復以後、30年以上の月日を経て、日中両国は互いに貿易の最重要相手国となった。その間、中国は国土開発、インフラ整備で目を見張る発展と遂げ、三菱重工はこの発展を大きく支える役割を果たしてきた。また、三菱重工は、いまや地球規模の対応が求められているエネルギーの有効活用や環境保全という問題に対し、先端技術を駆使して、幾多の効果的な対策を開発し、実用化を図ってきている。北京五輪、上海万博などが迫る中、三菱重工は中国のニーズに総合技術で応え、中国との関係を更に深めようとしている。



中田慶雄氏 増田信行氏

中国の国土開発・インフラ整備に大きく貢献した日本のODA。

中田 日本を代表する企業である三菱重工は、いまさら言うまでもありません

が、機械のデパートと呼ばれているように、発電、輸送、環境、社会基盤など、基幹産業のほぼすべての分野を事業領域としています。しかもこうした事業を、日本ばかりでなく世界中で展開しており、中国でも目覚ましい成果を挙げています。

中国では今年で第10次5カ年計画が終わり、来年から第11次の5カ年計画が始まろうとしています。西部大開発、東北振興、さらには中部内陸の開発など、沿岸部ばかりでなく、全中国での調和のとれた成長モデルが求められています。そうした中でエネルギー問題、環境問題が注目を集めています。

ODAを含めた日本の経済協力により、これまで中国ではさまざまなインフラ整備が行われてきましたが、そのインフラの充実により、中国経済は近年目覚ましい発展を遂げてきました。2001年にはWTOに加盟するなど、世界の工場として、また世界屈指の市場として、全世界の注目を集めている中国の社会基盤整備に、三菱重工はこれまでどのような役割を果たしてきたのでしょうか。

増田 ご承知のように過去のODA事業では、道路や空港、発電所といった大型経済インフラ、さらには環境、医療分野など社会インフラ整備のための、大型プロジェクトが実施されてきました。これが現代中国の経済発展に大きく寄与してきたことは、間違いのない事実です。その中で当社は、1996年から2000年にかけて、北京近郊の三河火力発電所35万キロワット×2基、山西省にある河津火力発電所35万キロワット×2基を建設するなど、中国のインフラ整備に、大きく貢献してきました。

周恩来総理の要請でスタートした三菱重工の中国事業

中田 国貿促では国交回復以前から、日中間の人の交流、技術交流のお手伝いを行ってきました。国交回復への動きが兆しだし、ちょうど田中角栄首相（当時）の訪中が日中間の話題になり始めた1972年の初夏、周恩来総理から当時の三菱グループの三首脳、重工の古賀繁一社長、銀行の田実渉会長、商事の藤野忠次郎社長に対し、訪中を要請する依頼が国貿促を通じてありました。そこで三菱グループの三首脳と国貿促の萩原理事長（当時）が8月に訪中することになり、私も通訳として同行しました。8月14日には周総理との会見が行われ、三首脳に対し「日本の経済界で大きな役割を果たしている三菱グループの力を、国交回復後は中国に貸してほしい。協力をよろしく」との話がありました。

増田 お話のように三菱グループと中国の関係は、1972年9月の日中国交回復

直前に、三菱グループの三首脳が訪中し、戦後の新しい三菱と中国との経済交流が始まりました。周恩来総理は三菱三社を友好企業と認定され、三菱グループの果たす役割に大きく期待し、両国の友好関係、アジアの発展に協力してほしいとの見解を表明されました。それに応え、古賀繁一三菱重工社長が、中国の国家建設に誠心誠意の協力を約束しますと述べ、周総理と固い握手を交わしました。その翌年には、周総理の要請を受け、ドレッシャー（浚渫）船3隻の建造に着手しました。

中田 その浚渫船の進水式が三菱重工の造船所で行われ、私は中国からの訪問団をお連れして式典に立ち会いました。

活発な技術交流で中国での社会基盤整備に貢献

中田 以来30年以上が経ち、いまや日中両国はお互いに欠かすことのできないパートナーとなりました。その間、三菱重工は、中国でどのように事業を展開してきたのでしょうか。

増田 さまざまな分野で事業を展開していますが、その中でも経済発展に不可欠な発電設備では大きく貢献してきたと思っております。1978年11月には大型火力発電所である宝山火力発電所1・2号機の建設を、日本企業として初めて受注し、1981年に完成させました。

私は1980年4月のドラム揚げ式にあたり初めて中国を訪問した際、上海タービン、上海ボイラー、上海発電機との技術交流を行いました。その後、1984年12月に、北京人民大会堂で火力発電設備技術交流会を行い、日本の最新発電技術を中国に紹介しました。このときは中国全土から100名以上の技術者の方々が集まり、交流会の後、タービン、ボイラー、発電機の分科会を行いました。

また1988、1989年には、中国の大容量電源開発を担う華能国際電力開発公司にとって初の輸入プラントとなる大連発電所1・2号機、福州発電所1・2号機を納入しました。原子力関係では、1984年5月に秦山原子力発電所（Ⅰ期）向け原子炉圧力容器を受注し、日本から初の原子力関連機器輸出となりました。

国交回復以後、こうした大きなプロジェクトを通じて中国の発展に貢献できたことは、当社にとって大きな喜びであり、また誇りでもあります。私自身も中国友好25周年、30周年のときに訪中した際、江沢民主席から、三菱に対して大変期待している旨のお言葉をいただきました。

中田 今後、三菱重工はどのようなスタンスで、対中ビジネスに臨んでいくのでしょうか。

増田 当社は昨年、向こう4年間の事業計画を立案しました。この中で三菱重工は、北米・欧州・中国・アジアの4極での事業に注力していくことを明確にしています。特に中国では合作、合弁、販売サービスの拠点整備を行うなど事業展開を進めることで、中国経済の発展に貢献していきたいと考えています。

三菱重工は中国において、現在17の現地法人で約2200人の現地従業員を採用し、事業の現地化に取り組んでいます。技術供与もすでに十数件に及んでいます。今年7月には北京に中国総代表を置き、事業拡大を推進しています。

機械の百貨店としての特長を生かし課題の解決に貢献

中田 三菱重工は広範に事業を展開していますが、特に「発電」、「輸送」、「環境」、「産業基盤」がよく知られています。今後、中国ではどのような事業に注力していく方針なのでしょうか。

増田 当社は産業の百貨店と言われるくらい製品の種類が多く、約700種類を扱っています。特に社会基盤の整備、インフラ設備を当社は得意としており、発電、エネルギー、環境、さらには製鉄・化学・セメントなどのプラント、工作機械などは世界中で採用され、高い評価を頂いています。こうした分野を中心に当社の持てる技術を結集して、中国の発展に貢献していきたいと考えています。

中田 三菱重工が中国ビジネスに力を入れておられる点をより具体的にお聞きたい。

増田 単に機械を輸出するだけではなく、中国が直面している課題、例えばエネルギーの確保、環境保全といった問題についても、互いに議論を重ねながら、当社の保有する先端技術を活かして発展に貢献していきたいと考えています。石油代替エネルギーとして、石炭からメタノールなどの化成品や、ジメチルエーテル（DME）などの新しい燃料を製造するプラント、天然ガスの受け入れ基地用タンクなどがその例です。環境保護関連では排煙脱硫、脱硝設備およびゴミ焼却設備、さらには水処理などでも貢献できます。

また産業基盤とは異なりますが、豊かな生活の象徴として、今後中国でも注目を集めるであろう、娯楽設備なども手がけています。すでに数年前、上海の大劇院に舞台装置を完成させ、現在は北京大劇院で建設中です。また、運動施設における開閉式ドーム屋根、観覧車など、多方面で幅広い分野で貢献していきたいと考えています。

環境をキーワードとした多様な発電方式を提供

中田 三菱重工の中国事業に関して、まず三菱重工がもっとも得意とする「発電」について、詳しく教えてください。

増田 これまで中国では石炭を中心とした火力発電設備の建設が中心でした。ところが最近では、石炭に代わる天然ガスの利用が進み、西気東輸や海外から輸入による天然ガスを利用する大型プロジェクトが進行しています。これにともない、当社は2003年に4地点で10基のガスタービンを受注しました。この受注に伴い、東方電気集団と広州市でガスタービンの中心部分の産販合弁企業を設立、本年8月には工場が竣工し、いよいよ生産を開始します。

また、鉄鋼生産の伸びが著しい中国で注目されるのが、製鉄所における高炉ガスの有効利用です。当社は得意とする高炉ガスタービン技術で、昨年度 鞍山、沙鋼、馬鞍山、邯鄲の4製鉄所より、高炉ガス利用発電プラントを受注しました。これまで高炉ガスの熱エネルギーは、そのまま大気に放出されていましたが、発電に活用することで、エネルギーの有効利用と環境保全が、同時に実現されることになりました。

中田 地球の資源は有限ですから、できるだけ有効に使うことが望まれています。資源の有効活用で環境汚染の防止ができれば、まさに一石二鳥ですね。

増田 さらに新しい試みとしては、中国に多くある炭鉱で発生するメタンを発電に利用できないかという検討を行っています。メタンは引火しやすい厄介なガスで、空中に拡散させると地球温暖化の原因にもなってしまいます。これを安全に取り出し、当社のガスエンジンで燃焼させ発電に活用できれば、エネルギーの有効利用と環境保全の両方に役立ちます。これらについて中国の石炭会社と検討を重ねており、ぜひとも日中協業で成功させたいと考えています。

中田 発電事業では原子力も欠かせませんね。中国での原子力発電の第1号機を泰山に設置したのも、三菱重工でした。84年に李鵬副総理が、国貿促の発足30周年の式典に来日した際、三菱重工神戸造船所で製造中の1号機の圧力容器を見学に行ったのを覚えています。原子力発電でも、三菱重工への期待は大きいと思うのですが…。

増田 原子力発電にも新しい時代が到来しています。中国では広東省陽江、浙江省三門の2地点に100万キロワットの発電所を計4基建設する計画が発表され、当社はウエスチングハウス社とコンソーシアムを組み、新型炉の採用を提案しています。本年末にはメーカーが決まる見込みですが、この

分野でもぜひ中国に貢献したいと思っています。

ビッグイベントを控え急ピッチで進む都市交通や環境改善事業

中田 三菱重工は「輸送」分野でも、さまざまなプロジェクトを進行しておりますね。

増田 中国では北京五輪、上海万博、広州アジア大会と大きな行事が目白押しで、都市交通インフラの整備が必要です。大都市の交通渋滞を考えると、今後の要となる交通機関は地下鉄ということになりますが、この地下鉄工事で当社のシールド掘削機が活躍しています。上海市地下鉄9号線、広州市地下鉄4号線、北京市地下鉄4号線での泥土圧式シールド掘削機を、最近相次いで受注し、中国におけるシールドマシンの受注累計は29機となりました。

また当社はLRT（次世代路面電車）やAPM（ゴムタイヤ式無人自動運転電車）といった新都市交通システムを世界各地に納入しています。都市の渋滞解消に有効ですので、中国でも活躍する機会があると考えています。

さらに、物流事業に欠かせないフォークリフトでは、大連フォークリフトと技術提携を行っており、当社の技術を生かした機材が各地の物流現場で活躍しています。

中田 最近、関心が大いに高まっている「環境」の分野では、どのようなプロジェクトが進行しているのでしょうか。

増田 三菱重工は、排ガスのような気体、ゴミのような固体、水処理のような液体、こうした処理施設の建設も得意分野としています。

気体関係では、中国でモデルプラントとなった1992、1993年に珞杓発電所排煙脱硫装置1・2号機を納入し、引き続きフェーズ2での納入も決まっています。また続いて山東省の黄島に半乾簡易式脱硫装置を納入し、高い評価を得ています。

ゴミ焼却関係では88年広東省深圳市向けに150トン/日×2基の焼却プラントを納入しました。このプロジェクトは中国初のゴミ焼却プラントとして現在まで順調に稼動しています。これまで中国では5プラント計10台を納入しており、各都市の環境保全に大きな力を発揮しています。

合併などで技術移転の進む産業基盤分野

中田 「産業基盤」分野では、工作機械、化学プラント、印刷機械など、数多くの製品群を有しており、現地生産を積極的に進められておられますね。

増田 この分野ではこれまで、設備の納入や合弁会社設立による協業、合作に積極的に取り組んできました。

製鉄機械では1990年代から宝山、鞍山および本溪製鉄所などに熱延・冷延設備、酸洗設備などを納入しています。また、94年には上海に宝山鋼鉄集団と、製鉄機械設計の合弁会社を設立しました。このときは私も合弁の調印などで、何度も宝山製鉄所に出向きました。また、1996年に江蘇省常州市に同集団と製鉄機械設備の加工・組立てを行う会社を設立しました。

化学プラント関係では、1998年に吉林省で年産10万トンのスチレンモノマープラントを建設。さらに、1999年には貴州省福泉に年産1200トン×2基の硫酸プラントを建設しました。

冷熱製品では、1990年代初めから中国における生産企業の立上げを行っています。93年には海爾集団との合弁で、三菱重工海爾(青島)空調機有限公司を設立しました。ご承知のように海爾集団はその後急成長を遂げており、礎の一部を築くことに貢献できたのではないかと考えています。

中田 海爾集団は以前ドイツの会社と合弁を組んでいましたが、あまりうまくいっていなかったと聞いています。それが三菱重工と組んでから、急成長を遂げましたね。

増田 この事業では私どもも海爾集団の事業手法を勉強させてもらっており、双方にとってメリットがあったと思っています。その後も、1994年に広東省江門市で小型家庭用ルームエアコンの合弁企業を、2003年には上海市でカーエアコンの生産・販売の合弁会社を設立しました。またこれから伸びると見込んでいる事業に、輸送用冷凍装置があります。中国でも肉や野菜を新鮮なまま遠くまで運ぶニーズが高まっており、当社の陸上・海上輸送用冷凍装置は大いに役立つと考えています。

また最近のプロジェクトとしては、北京市の衛生環境改善と慢性的な水不足対策として、大型連続洗濯機の技術を生かしたリネンクリーニング事業を新燕莎集団との合弁で推進しています。これまで大量の水を必要としていた業務用クリーニング事業が少量の水で可能になり、環境対策と節水対策に役立つ事業になったと自負しています。

このほか、製紙機械、工作機械など、当社は中国のインフラ建設に役立つ多くの技術を所有しており、これからも社会の根底をしっかりと支える「縁の下の力持ち」として、中国の経済発展に貢献していきたいと思っています。

技術移転などの事業を通じて社会的責任を推進

中田 三菱重工の技術は国際的にも高く評価されていますが、中国との協力関係をさらに深めていくために、どのような施策を考えておられるのでしょうか。例えば、環境技術も含めた技術協力の面では如何でしょうか。

増田 日本は長年「技術立国」を標榜し、当社も「技術の三菱」という評価を頂いてきました。そうした中、当社は中国への技術移転をいち早く積極的に展開してきました。

1993年には杭州ボイラーとマルチン式都市ゴミ焼却炉の技術供与契約を締結し、都市の環境改善に貢献しています。1994年には宝山鋼鉄と製鉄機械の設計・生産を行う合弁企業を設立し、その合弁企業に技術供与を行いました。その後も、脱硫装置、空調機、フォークリフト、エンジンなどの製品技術の移転を続け、最近発電用ガスタービンの合弁企業を東方タービンと立上げて技術移転を行いました。また、先進的超臨界圧ボイラー技術に関しては、ハルピンボイラーと技術供与契約を締結するなど、技術移転を活発に続けています。今後はこうした技術を用い、中国の優秀な技術者と共に、中国市場の要求に応える製品開発を行っていきたいと思っています。

中田 近年、日本では企業の社会的責任ということが、重要視されています。三菱重工は中国事業でどのような社会的責任を果たしていこうとしておられるのでしょうか。

増田 当社は企業の社会的責任（CSR）とは、会社の存続基盤そのものであると考えております。当社の中国事業に関しても、ビジネスの基本となる「コンプライアンス」、社是である「社業を通じた社会への貢献」、そして「エネルギー・環境問題への貢献」の3つをベースに据えています。コンプライアンスの徹底を図りながら、同時に発電所・環境設備などの社会基盤づくりに関わる製品を通じて社会に貢献する。それが当社のCSRに対する基本姿勢です。

中田 私が若い頃は、三菱モデルは日本のモデルであるから、三菱重工のビジネスモデルをしっかりと勉強するようと言われたものです。本日のお話をうかがって、三菱重工のよき伝統である社会貢献、国際貢献が現在に受け継がれていることを強く感じました。

増田 三菱重工は、いまお話した3つの基盤の上に立ち、経済分野での協調・協力を深めることで、日中両国の友好関係をさらに前進させたいと考えています。中国社会と日本企業とが共にWin-Winの関係を築き強化していくことが、日中友好の絆を深めるとともに、アジアや世界の経済の安定と発展につながっていくものと確信しています。

中田 これからも三菱重工のよき伝統を生かして、日中友好さらにはアジア、世界とのよりよい関係づくりに邁進して頂きたいと思います。本日はあり

がとうございました。

増田 信行

1957年、九州大学工学部卒業、三菱造船入社。1990年、三菱重工下関造船所長。1991年、取締役。1994年、取締役副社長。1995年、取締役社長。1999年、取締役会長。2003年、相談役に就任し現在に至る。

中田 慶雄

1930年生まれ。45年、中国にわたり、戦後、中華人民大学、上海復旦大学で学ぶ。58年、日本に帰国。64年より、日本国際貿易促進協会に勤務し、94年より理事長。